
悪魔の継承

剛雷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔の継承

【Nコード】

N4043BA

【作者名】

剛雷

【あらすじ】

悪魔にも善と悪がいた。

主人公は勉強はそこそこできて、ケンカは勝ったことがないダメ人間。

ある日、突如自分の部屋に黒い箱が現れ、箱を開けると悪魔界に飛ばされてしまった。そこで主人公は善の小悪魔に出会い、やがて命がけの討伐任務を言い果たされる。その討伐任務の内容とは!?

謎の黒い箱

自分はこの特に何もない街に住む中学三年生。

名は松田隼人。まつだはやと

勉強は・・・まあだいたいできているが、ケンカは勝ったことがない。

父親は僕が小さい頃からいない。母親は真面目すぎる人だ。

何故、学校に行かなければならないのだろう。

と、思うときもある。

中学生になってから三年経ったが、将来の夢なんて考えたことはない。

というダメ人生を過ごしている僕に、まるで人生がメチャクチャに変わる出来事が起こる。

その出来事は放課後に起きた。

部活動がない僕はいつもと変わらず家に帰った。

家に帰ってもいつもと変わらない。

母親は掃除機を持ってリビングを掃除している。

僕は自分の部屋に入り、バックを置こうとしたとき部屋に見たこともない黒い箱が置かれていた。

宅配物だろうか？だがそんなはずはない。

僕は母さんに聞いた。

「母さん、この箱なに？」

母さんは答えた。

「箱？なに言ってるの？」

母さんはこの黒い箱のことは知らないのだろうか？
いや、きっと母さんは40代だから物忘れをしたのだろう。

僕は母さんを自分の部屋に連れてきて箱を見せようとしたとき、
部屋に黒い箱はなかった。

つい僕は「あれっ？」と声をもらしてしまう。
母さんはあきれた顔をしてリビングに戻ってしまった。
確かにさっきは黒い箱があったはずだが……。

僕はリビングに行き、母さんをもう一度呼んだ。
しかし母さんはこう言う。

「もうすぐ受験なんだから勉強したらどう？」

僕のやる気を無くす魔法の言葉であり、毎日必ず一度は言われる言葉だ。

僕はあの黒い箱のことは忘れようと決意して部屋に戻ると、あの黒い箱があった。

黒い箱からかすかだが「おいで……。」という声が聞こえる。

僕はホラー映画でも見ているのか……？と思うほど怖った。

僕は黒い箱を見つめながら母さんと呼んだ。

しかし母さんに無視され、

僕は目の前にある黒い箱に近ずいた。

一体中から何が出てくるのだろうか？

ゾンビ？ 魔神？ 亡霊？

恐怖しかイメージできない僕は、手をガクガクさせながらも箱を開

ける。

パカッと箱が開いた。

中からはこの世のものとは思えない煙が部屋中にただよった。

僕は煙に包まれた。すごい悪臭だ。

まるで汗だらだらジジイの靴下が僕を囲んでいるようだ。

煙が消えて僕は箱の中身を見た。何もない空っぽだ。

まさか煙に包まれておじいさんになったのか？と思い鏡を見たがイケメ・・・いや、いつもと同じ顔だ。

僕は気が付いた。

静かだ。まるで深夜みたいに外が静かなのだ。

僕はリビングに行った。母さんの姿はない。

さらに学生服のまま外に出たが誰もいない。

これは悪夢か？と思いながら住宅街を走り、学校を走り、商店街を走りまくったが、誰一人いない。

僕は空を見上げた。空は青色ではなく紫色。

生き物はカラスしかない。

間違いない、これは悪い夢だ！

いや、むしろ夢じゃなかったら困る。

僕は顔をつねった。ついでに一発顔を殴った。

痛い。涙がでてきた・・・。

ということは夢ではないのか！？

僕は心を落ち着かせて家に戻ることにした。

小悪魔レアル

僕は家に帰った。

ここは一体どこなのだろうか？

人は誰一人いない。空は紫色。生き物はカラスのみ。

当然、家に帰っても誰もいない・・・はずだが！

僕の部屋に小さな小娘がいたのだ。ホントに小さい。手のひらサイズだ・・・。

しかも浮いている！

そのとき僕は気づいた。この小娘は悪魔だと！

なぜなら肌は青く、眼は紅い。しかも黒い翼と黒い尻尾まであるのだ！

僕は悪魔だと確信すると、部屋を出て逃げ出した。そして叫んだ。

「殺される、殺される、殺されるうううううう！！」

家の玄関を開けようとしたがビクともしない、まったく動かなかった。

小悪魔は逃げ場を失った僕に近づいて来る。

心臓がバクバクなっている。

もう僕の人生はこの小悪魔によって幕を閉じる・・・。

と思っていると恐怖で意識がだんだん無くなり、目の前が真っ暗になった。

やがて目が覚めると僕は自分の部屋にあるベッドの上にいた。

やはりあれは夢か・・・。と思いながら横を見ると、あの小悪魔が

いた。

今までののは夢ではない、現実だ！

小悪魔は僕を見ている。恐怖で涙が枯れ果てている。

小悪魔は不機嫌そうに言った。

「やっと起きたか。待ちくたびれたぞ。」

どうやらこの小悪魔は僕が起きるのを待っていたらしい……。けどなぜ？

僕は勇気を振り絞って聞いてみた。

「あ……あなたは……誰……？」

小悪魔は正体を語った。

「アタシは悪魔王の部下、名はレアルだ。」

僕の頭の中は混乱状態。僕はすかさず質問した。

「悪魔王ってなに？」

レアルは即質問に答えた。

「この世界に君臨する王様のことだ。知らないのか？」

さらに僕は質問した。

「っていうかこの世界ってここはどこだよ？」

レアルはバカにした顔で言った。

「なに言ってるんだい？ここは悪魔界だぞ。」

僕の混乱はピークに達していた。

しかし人が誰一人いないのも、空が紫色なもの、ついでに生き物がカラスしかないのも、全てつじつまが合う。

そしてレアルは全てを話した。

「アタシは悪魔王から授かりし使命のために、お前をこの悪魔界に連れてきたんだ。」

「じゃあ、あの黒い箱はお前が僕の部屋に置いたのか？」

僕はさらに質問した。

「なんで僕を悪魔界に？ 帰る方法は？」

レアルは怒鳴った。

「一気に質問するなあ！！」

僕は言葉を失った。レアルは質問に答えてくれた。

「お前を悪魔界に連れてきたのは悪魔王が数々の人間の中からお前を選んだからだ。

ついでに、あの黒い箱は我々悪魔が使う時空間転送システム。

名付けてブラックボックスだ。」

「そのまんまじゃん！」と僕はついクセで悪魔にツッコミをしてしまった。

レアルは気にせずただ一言。「ついて来い。」と言って家を出て行ってしまった。

僕はここにも意味がないのでレアルについて行くことにした。

悪魔王からの強制任務

僕とレアルは街をひたすら歩いていた。

僕はこれからどこに行くか、レアルに聞いてみることにした。

「レアルさん・・・だっけ？今からどこに行くんですか？」

レアルは簡単に答えてしまった。

「悪魔王の城だよ。悪魔王に会いに行くためにね。」

僕の足はピタツと止まってしまった。

てっきり僕はレアルが元の世界に戻してくれると思ったが、僕の考えが甘かった。

だがこのままここにいても嫌な予感がする。

僕はレアルについて行けば人間界に戻る手が見つけれられるかもしれない。

そう思って僕はレアルについて行った。

それにしても悪魔界は人間界と似ている。

街並みもそうだが、悪魔界にも昼と夜があるのだ。

夜が訪れた。

すると悪魔がザワザワと現れていく。

空を見上げるとたくさんの悪魔がバサバサと飛んでいる。

やがて城にたどり着いた。

レアルは立ち止った。そして一言、

「この城に悪魔王がいらっしゃる。」と言い、門を開けた。

僕は足の震えが止まらない。

そんな僕にレアルは「怖いのか？」と聞いてきた。

僕は「うん。」しか言えなかった。

悪魔王に会ったらどうなるのだろうか？

まず最初に拷問されて、その次に人間だと知られて、最後に殺される……。

ああ……できれば想像したくない。

そしてついに僕は悪魔王の部屋に来てしまった。

周りには鎧を身に着けている悪魔が100人？いや……300人はいらるだろう。

レアルはいきなり土下座をして報告した。

「報告します。このレアルただいま帰還しました。」

なぜ土下座なのだろうか？

よく見ると周りにいる悪魔全員が土下座している。

ここは場の空気を読んで僕も土下座をしたほうがいいだろう。

僕が土下座をした瞬間、レアルや周りにいる悪魔たちは土下座をやめた。

僕だけ土下座をして悲しい……。

僕は顔を上げると悪魔王はこっちを見ていた。

僕の心にあるのは恐怖と絶望のみ。

それでも僕はわずかな勇気を振り絞って悪魔王に聞いてみた。

「あ……ああなたが……、ああ……ああ悪魔王ででしょうか……？」

声まで震えている。

きつとあと3分後には殺されているのかもしれない。

悪魔王は「そうだよおん。」と言った。
さらに笑顔で「悪魔界にようこそおん！かわいい人間ちゃん。」
と言った。

僕は驚いた。

逆に怖くなるほど驚いた。

外見は顔は骨で蔽つく翼は黒くてでかい。
なのに口調はオカマなのだ。

少し落ち着いた僕は悪魔王に質問してみた。

「なんで僕を悪魔界につれて来たのですか？」

すると悪魔王は聞き返した。

「それはねえ、そんなに聞きたいい？」

う・・・ウザいいいいいい！！！！

僕は本音を抑えて、「聞きたいです。」と言った。
すると悪魔王は語り始めた。

「悪魔にも善と悪っちゅう違いがあるんだけどよお、
殺しを趣味にする悪い悪魔たちが人間界に逃げてしまったんでござ
んすうゝ！」

悪魔に善がいるのだろうか？

この話どおりなら人間界に悪魔がいることになる。
僕は聞いてみた。

「えっ？じゃあ人間界にも悪魔がいるのですか？」

悪魔王は鼻をほじくりながら答えた。

「YES! だあかあらあ人間界にいる悪い悪魔を倒してもらいたいで討伐ヨロピク☆」

僕は納得がいかない。

悪魔の問題は悪魔が解決すべきだ!

と思いながら僕は断ろうとした。

「あのー、実は僕そのですな用事があって・・・。」

悪魔王はさわやかなスマイルで言った。

「いいんだよ? やらなくても。」

そしたら地獄の果てまで君を追いかけて、殴って蹴飛ばしてえ、ロボロに潰すまで☆」

それから悪魔王はずっと笑っていた。

きっと僕がロボロになるのを想像していたのだろう。

僕は思った。

やはり悪魔に善なんていないのでは・・・?

悪魔討伐任務開始

僕は今、気まづかった。

人間界には帰れるけれど、悪魔と戦わなければいけないなんて…。

僕はそんなことを思っていると悪魔王は僕の頭に手のひらを置いた。そして悪魔王こう言った。

「討伐ガンバツ♪」

他人事過ぎない！？とと思っているといつの間に僕は人間界の自分の部屋に転送された。

人間界も夜だった。

悪魔の討伐はリアルも手伝ってくれるらしいが、とても討伐できそうにない。

ケンカで勝ったことがなく、しかも小学生にボールを顔に当てられ泣いた僕が、人間より強い悪魔を倒すなんて100%あり得ないのだ。

僕は母さんの「夕食できたわよー！」という声が聞こえたのでリビングに向かった。

そして次の日。

時間はAM5…28分。

僕は小悪魔リアルに蹴り飛ばされて起きた。

学校はAM8…30からだというのに、なんていう迷惑だ。

学校なんてなにも知らないリアルは「学校に行くぞ！」と何度もうるさいのだ。

僕はつい怒鳴ってしまい、母さんが部屋に入ってきた。

「朝から一人で怒鳴ってどうしたの？」

と聞いてきた。

読者の皆様は気づいたでしょうか？

そう、僕にしかレアルの姿が見えないのである。

ついでにレアルの声も聞こえないらしい…。

おまけに一話にできた黒い箱もそうだ。
ブラックボックス

まあそんなことはどうでもいい。

僕は二度寝することにした。

再び目が覚めてアナログ時計を見ると…。

え〜と：AM 8…26分だ。

学校は8…30分からだから…。

ハイ、遅刻だね☆

僕はすごいスピードで家を出た。

猛ダッシュだ。

もしかしたら今の僕は流れ星より速いかもしれない。

僕の頭の中は真っ白だ。

意識もうすぐ失われそうだ…。

なぜこんなに走るのかというと、担任はあの超恐いって噂の秋田なのだ。

普段は優しく微笑む天使のみたいなのだが、

頭に火がつくと獰猛な肉食恐竜になる。

僕の担任は悪魔なのかもしれない。

と思った頃に「キーンコーンカーンコーン」のチャイムの音が聞こえた。

もう手遅れだ。

僕は走る気力がなくなってしまった。

今は放課後。

担任にはメチャクチャ怒鳴られ耳がクラクラしている。

そして帰り道。

僕のたった一人の友達、山田 真司^{やまだしんじ}といっしょに帰っていた。とはいえ小悪魔のレアルもいっしょだが…。

そんな僕たちを空から見ていた者たちがいた…。

そう…悪魔だ…。

悪魔は三人いた。

一人は剣を腰に身に着けていて、

一人は黒衣の小悪魔。

そして真ん中にいる大將は腕にコウモリの刺青をしていて、左目に刀傷の跡がある。

この悪魔たちが僕たちのことを見ていたのは知らなかった。

剣を身に着けている悪魔は言った。

「あの小悪魔は…レアルだな…。」

黒衣の小悪魔も続いて言った。

「あいつが人間界にいと厄介だ…。殺しちゃおうか…。」

大將は一言、「待て。」と言って僕たちを黙って見ていた。

僕はそんなことは知らずに家に帰った。

レアルも悪魔に見られていたなんて知らない。と思っていた…。。

圧倒的な悪魔

悪魔には二種類の悪魔がいる。

それは善と悪だ。

悪魔にも人間同様、良い悪魔と悪い悪魔がいるのだ。

この物語は人間が、

善の悪魔の力を継承し、悪の悪魔を倒す物語。

今日は土曜日。学校は休みだ。

午後から友達の実司と遊びに行く約束をしていた。

P M 1 3 .. 0 0

僕は駅に待ち合わせ時間ぴったりに来た。

実司はもう来ていた。

さすが常時たいくつ人間だ。

いつも「暇だ。」と言っていて、携帯でメールをすると約6秒で返信が返ってくる。

それが山田実司^{やまだしんじ}だ。

今から行くのは学生の遊び場、ゲームセンターだ。

僕たちが住む町にあるゲームセンターは小さく行ってもつまらない。なので隣のゲームセンターに行くことにした。

電車に乗ったとき、ズボンが妙に重いことに気がついた。

僕はズボンのポケットを探ろうとしたとき、ポケットから黒い尻尾がはみ出ていることに気付いた。

まさか…この尻尾は…！

僕は尻尾をつかみ、ポケットの中から引っぱり出した。
ポケットの中にいたのはやはり小悪魔のレアルだ。

僕は小さな声でレアルに聞いた。

「なんでお前がポケットの中にいるんだよ!?!」

レアルはただ一言。「暇だから。」と言って肩に乗ってきた。
ここまで来てしまったのでは仕方がない。

真司や一般人にはレアルの姿は見えないし、連れて行くことにした。

やがて隣町についた。

ゲームセンターは駅を出てすぐ目の前にある。

僕は肩にレアルを乗せたままゲームセンターに入ろうとしたとき、
僕と真司の目の前に斬撃が飛んできた。そして衝撃で吹っ飛んでしまった。

人々は悲鳴を上げながら逃げていく。

僕は空を見上げた。

空には剣を持っている人……ではない。
剣を持っている悪魔が空に浮いていた。

あの悪魔はレアルとは違って真司や一般人にも見えるようだ。

「なんだお前?」と真司は悪魔に聞きながら近づいた。

僕は真司に「危ない!」と言おうと思った瞬間。

真司が僕のところまで吹っ飛んできた。

「大丈夫か真司!?!」と聞きながら様子を見たが、気絶していた。

レアルはぼそつと言った。

ソードマン・デビルズ

「その黒刀…悪魔六剣士の一人…ネロスか…。」

ネロスと思われらしき悪魔はレアルに話しかけた。

「お前と会うのは久しいな…。呪われた小悪魔リアル…。」

僕から見て二人の会話はチンプンカンプン。

二人は知り合いなのか…？

ネロスはリアルに指を指して言った。

「やっと見つけたぞ。いっしょに来てもらおうリアルよ。」

リアルは「ちっ」と舌打ちをした。

僕は「あの悪魔は誰？」と聞いた。

するとリアルは答えた。

「あの悪魔は悪魔界のエリート剣士、ソードマン・デビルズ悪魔六剣士の一人で殺しを趣味にする悪い悪魔。ネロスだ。」

ネロスは刀を振り上げた。

「嫌なら力づくで連れて行くまでだ！」

と言い、刀を振った。

刀から飛んでくる斬撃が僕を襲った。

致命傷は避けたが右肩をかすられた。

真司といっしょに僕も気絶しそうだ。

僕は走って逃げることにした。

まさか悪魔があんなに強いなんて誰が思ったのだろうか…？

僕が逃げているとネロスは「逃がすかよ」と言っすてすごいスピードで追撃してくる。

僕は簡単に背後を斬られた。

ドサツと倒れてしまった僕はもう立って逃げる力がなかった。
やはり悪魔は強すぎた…。

ネロスは刀を振り上げこう言った。

「まず、この人間からブツた斬ってやろう。」と。

僕の人生は終わりだ。バイバイ、みんな♪

と思ったときネロスが誰かに殴られ吹っ飛んだ。

僕は何が起きたかわからなかった。

周りを見渡した。すると黒い剣を持っている大学生が立っていた。きっとあの大学生がネロスを吹っ飛ばしてくれたのだろう。

しかしあの大学生は何者なのか…？

悪魔武器

前回、僕は悪魔と遭遇してしまいグチャグチャのボロボロのズタズタにされ、

トドメを刺される瞬間、謎の大学生に助けられた。

ネロスは起き上がり、大学生が持っている黒い剣をにらみ指を指した。

「貴様……その剣は…悪魔武器だな……。」

大学生は外国人のようだ。

目は青く髪が黄色い。

とそんなことはどうでもいい。

今はこの戦場から逃げたいが身体が動かない。

ネロスが大学生に攻撃をしかけた。

「その首もらったあ！！」と叫びながら黒刀を振った。

しかし大学生は剣で攻撃を防ぎ、ネロスの腕をつかみ投げ飛ばした。

なんだあの大学生は…。メチャクチャかつこえ…。

ネロスは建物に衝突した。

大学生は僕たちに「今だ、逃げるぞ！！」と叫んだ。

意識を取り戻した真司は言われなくとも走って行った。

しかし僕の身体はボロボロで動くことすらできない。

僕は大学生に背負ってもらい、病院に逃げ込んだ。

僕の姿を見て医者はびっくり仰天。

右肩に浅い切り傷。背中からは血がドロドロ出ている。

僕は一週間の入院になり、病室のベッドで寝ていた。

大学生と真司が部屋に入って来た。

大学生は話し始めた。

「俺がお前を見つけることができたのはこいつのおかげだ。」

と言いつつコートの胸ポケットから手のひらサイズの黒猫がでてきた。

僕は聞いた。

「あなたは一体何者なんですか？」と。もしかしたら人間に化けた悪魔なのかもしれない。

すると大学生は、

「俺はアメリカ人のマースだ。何とでも呼んでくれ。」と言った。そして全てを話してくれた。

「俺は幼少の頃から日本に住んでいるが、一ヶ月前。自分の部屋に黒い箱ブラックボックスが置いてあったんだ。

そして箱を開け、俺は悪魔界に行った。」

マースさんは僕と同じことをしていた。

「そして悪魔王に討伐任務を任された。

人間界に逃げた三人の悪魔の討伐だ…。」

僕は聞き返した。

「えっ！？人間界に逃げた悪魔って三人もいるんですか！？」

「おそらく三人とも共に行動しているのだろう…。」

この日はしばらくマースさんと話をした。
やがて一週間たった。

僕は退院の許可が出て久しぶりに外の空気を吸った。

僕は悪魔王に用があったので、自分の部屋にある黒い箱ブラックボックスを使い悪魔界に行くことにした。

悪魔界にいくのは二度目だが、
箱から出てくる煙はやはり臭くて気持ち悪い。

悪魔界にたどり着くと僕はさっそく悪魔王がいる悪魔城に向けて歩き出した。

僕は城の門をくぐり、悪魔王の部屋に入ると小悪魔のレアルと悪魔王が会話をしていた。

レアルは深刻そうな顔をして部屋を出て行った。
僕は悪魔王に聞いてみた。

「あの：悪魔王さん：？」

悪魔王はこっちを向いた。

「さんではない、様でしょ！で？何の用？」

僕は正直に答えた。

「僕には：悪魔の討伐はできません：。」

「なにい！？何故だあ！！」と言って僕に近づいてきた。
僕は勇気を出して答えた。

「人間にもケンカで勝てない僕が悪魔に勝なんて、できるわけがない！！それに：。」

「それにい…?」

悪魔王はやさしく質問してくる…いや、やさしいのではない…ウザいだけだ。

僕は答えた。

「それに悪魔には手も足も出なかった…。」と。

悪魔王は「困ったなあ…。」と言い黙り込んでしまった。

そのとき鎧をつけた300人の悪魔の一人が悪魔王に質問した。

「マース氏のように隼人氏にも悪魔武器を渡すのはどうですか?」

悪魔王は嫌な顔で答えた。

「あるのにはあるのだがこの武器はリスクが大きすぎるんるん。隼人ちゃんが使うには危険すぎるつちよ。」

と言いつつ悪魔王は小さな箱を取り出した。

「悪魔でこの武器を扱うことができた者はだーれもない。わしも含めてね。

だが人間はわからない。人間の能力は未知数だからねえ。」

悪魔王は箱を開けた。

箱の中には骨の腕輪が入っていた。

「これは悪魔インヘリタンスの継承という腕輪で間違った使い方をすれば、

取り返しのつかないことになってしまう。と言われているんだよん。」

僕は気がついた。

この腕輪…どこかで見たことがある…と…。

これが自分の運命のように感じた。

僕は腕輪を取り、悪魔討伐任務を続行することにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4043ba/>

悪魔の継承

2012年1月13日19時47分発行